令和５年度　加古川「知」を結ぶプロジェクト　各チーム発表概要・所感・活動の様子

No.1

■チーム名　：足立ゼミ

■指導教員：足立泰美（経済学部）

■テーマ　　：市と企業を結ぶ雇用・子育て支援政策

■発表概要

本研究では、加古川市で就職し、仕事をしながら結婚・出産・子育てを送れるように、加古川市における今ある既存の行政サービスならびに加古川市に立地する企業の福利厚生を調査し、視察およびヒアリングを実施し、より地域住民に有効な政策への改善を目指した政策提案を行った。具体的には、多木化学株式会社様、滝川工業株式会社様、株式会社テイエルブイ様のご協力のもと、各企業周辺の居住状況および子育て環境を調べ、理想とする生活と、各企業で仕事と子育てで活躍する皆様のヒアリングをもとに、理想と現実の乖離を埋める政策を思案した。

■学生代表者所感

代表者：経済学部　２回生　坂本悠

今回の活動では、ヒアリングや視察を通して得た情報をもとに意見を出し合い、政策提案を行った。なかでも苦労したことは、仕事と子育ての両立をしている方々が求める政策について、実現可能性を考慮した政策を詳しく考えることや、提案する政策に説得力を持たせることである。特に、提案する政策に説得力を持たせるためには、データでの裏付けや、どのような背景からその政策を提案したのかということを筋道立てて説明することが大切であることを学び、自分たちの将来の糧に繋げていきたいと考えている。ゼミ活動日以外でも全員で集まり発表練習を行うなど、とてもやりがいのある活動だった。

■活動の様子

No. 2

■チーム名　：金坂ゼミ

■指導教員：金坂成通（マネジメント創造学部）

■テーマ　　：地域食材を活用した料理の販売と農業者の販路拡大への提案

■発表概要

私たちは加古川市農林水産課から課題提供を受け、農業の振興について研究した。まず、データ分析により、実際に農家の高齢化と減少が急速に進んでいること、㈱八幡営農様、㈱ゼブラグリーンズ様、㈱ふぁーみんサポート東はりま様へのフィールドワークによる聞き取り調査から、農家の販路拡大に課題があり重視すべきことを確認した。そこで、私たちは①大学祭である摂津祭での加古川農作物を使った料理店の出店を通じた認知の拡大、②産直 EC サイトと加古川市が包括連携協定を結ぶことによる販路の拡大を提案した。①については SNS で拡散することと、継続性を高めるため市に情報を提供すること、②については農業の DX 推進に貢献できることも強調した。

■学生代表者所感

代表者：マネジメント創造学部　４年　足立帆華

本チームは加古川市の農業振興についての研究に取り組みました。授業内で文献調査やデータ分析をするだけでなく、フィールドワークで実際に就農者の方のお話を伺い、販路開拓が困難という課題がより鮮明に見えてきました。そこで私たちは「販路」に焦点を当て解決策を導くことにしましたが、実現可能性という点において最も苦労しました。授業外にも集まり、提案をより具体的かつ実現性の高いものへと追究したこと、チームみんなで意見を出したことで、最終的に自分たちが納得のいく提案を出すことができました。このプロジェクトから、ヒアリングの重要性とチームで取り組むことの楽しさと難しさを学びました。とても貴重な経験をありがとうございました。

■活動の様子

No.3

■チーム名　：望月ゼミ

■指導教員：望月　徹（経営学部）

■テーマ　　：かわのまちマーケットによる加古川中心エリアの活性化について

■発表概要

加古川市において、令和５年４月から始まったかわのまちマーケットに着目し、全国の 100 以上の実践事例を研究し、公共空間の活用、関係性の構築、中心地域の将来ビジョンの３つの観点から、加古川市の中心エリアの活性化のあり方を検討した。３年生が行った「加古川おしゃれピクニック」の実証実験とも連動し、市民へのアンケート調査など現地調査も丁寧に行った。調査・研究の結果、かわのまちマーケットには、新たな関係性を生み出す高いポテンシャルがあり、先進地事例を応用しチャレンジの場を設けることが、中心地の活性化へつながることがわかり、それを発表した。ゼミ生に、このような貴重な機会を与えて頂いた関係の皆様に心より感謝申し上げたい。

■学生代表者所感

代表者：経営学部　２回生　竹村拓記

今回の活動を通してプレゼンテーションにおける大切なものが得られたと考える。誰に対しての提案なのかを念頭に置くこと、最初に自分たちが描くビジョンを定めること、企業や経営者の方、地元住民の方たちにリスペクトの心を持つこと、の３つはこれからのゼミ活動において中心となる教訓だった。中間発表でこれらを欠いた発表をしてしまい、かわまちづくり舎様にご指摘を受け、期限が迫る中でもこれらの教訓を突き詰めたプレゼンテーションを最後まで模索した結果が今回の優秀賞という結果につながったと考える。来期には、ゼミ甲子園なども控えているが、今回得られた、教訓、経験、そして自信をもとにゼミ生全員でさらに成長していきたいと思う。

■活動の様子